

「教皇フランシスコとカトリック・カリスマ刷新」

「教皇フランシスコとカトリック・カリスマ刷新」 Cyril John

—新しい教皇は、教皇ヨハネ23世が夢見た「現代化」を生きておられ、そして前任者（ベネディクト16世教皇）が呼び求めた「真の刷新」に向けて働いておられます。—

教皇ベネディクト16世が2013年2月11日に突然の辞任を発表して世を驚かせた直後から、3月12日に始まる公式コンクラーベの日程にかなり先立って枢機卿たちは世界中からバチカンに集まり始めました。2月28日の夕刻8時から、教皇の辞任は発効し、カトリック教会は首長が居なくなり、教皇フランシスコが公式に聖ピエトロ大聖堂のペトロに後継者と着座された3月19日まで教皇空位状態を歩んだのでした。世界中からの赤い帽子をかぶる「教会の皇子たち」（枢機卿）がシステイン礼拝堂に入るや、賭博市場、賭博師、メディアたちが「パパピリ（教皇にふさわしい人）」の予想や教皇候補者リストをもって現れました。わたし（シジル・ジョン）が見ていたどのリストにもアルゼンチンのブエノスアイレス教区のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ（Jorge Mario Bergoglio）枢機卿の名前を有力教皇候補者として載せたリストはありませんでした。人数からいえば、イタリア、米合衆国、ドイツ、インドからの枢機卿たちがどの国よりも多かったのです。2013年3月12日に、80歳以下の115人の枢機卿たちで構成するコンクラーベがミサと祈りを以って始まったとき、バチカン・ウォッチャーたちは、有力候補者が浮かばないためコンクラーベは長引くと予想していました。教会の歴史の中では、無期限に延びた教皇選挙の事例もあります。たとえば、1268年枢機卿のコンクラーベは、教皇グレゴリオ10世を選出するまでに2年余を要しました。近年の歴史においても、1740年の教皇選挙は、ベネディクト15世を選出するまでに181日を要しました。3月12日に一回目の投票が始まった今回のコンクラーベは、3月13日の5回目の投票で決着しました。教会も世の中も、これほど早く三分の二多数が実現するとは期待していませんでした。76歳のホルヘ・マリオ・ベルゴリオ（Jorge Mario Bergoglio）枢機卿の選出は、世間を非常に驚かせることになりました。この方は、このコンクラーベの第二日でも全く最有力候補ではありませんでした。

このように新教皇の早期選出に導いたのはどうしてなのだろうと思いませんか？世界中の人びとがこの度は以前にも増して一層の熱情で、聖霊に充たされ、聖霊に導かれた羊飼いが選ばれて教会を導くようにと祈りました。教会がその歴史上もっとも困難な時期の一つに遭遇し、恐ろしい諸問題に直面しているからです。メディアの発達で、今日では以前にも増して祈りを効果的に動員し、ネットワークして結ぶのが容易になっています。ICCRS（国際カトリック・カリスマ刷新奉仕団体）の「とりなし分科会」のコーディネーターとして、わたし（Cyril John）は、ICCRS 評議員たちを通して世界中のカリスマ刷新各国奉仕委員会に、この教皇選挙のための祈りに人びとが参加するよう立ち上がってほしいとかねて何回も要請しました。この他に多くの祈りのネットワークが、とりわけ何百万人の信徒がとりなしの祈りを確約していたネットワークもありました。

「教皇フランシスコとカトリック・カリスマ刷新」

たとえば、ある一つのウェブサイトは、その利用者に教皇選挙に先駆けとなるある枢機卿を無作為に選任する方法で50万人以上から応答を得ていました。ウェブサイト www.adoptacardinal.org (枢機卿を指名する) は、次のメッセージを載せました。：「このようにすばらしい、賢く優しい教皇ベネディクト16世を私たちにお与えくださった神にあなた方は限りない感謝を捧げていますか？教会が価値ある継承者、岩の信仰、聖霊に開かれた指導者、祈り豊かなそして聖なる教皇に恵まれることをあなた方は誠実に希望していますか？あなたの祈りに力を通して貢献し、それによって私たちの枢機卿たちが聖ペトロの次期継承者を決めるのに当たり、聖霊が彼らを導き、守り、啓発することを、キリストの身体の一部であるあなたは望んでいますか？」それから、そのサイト利用者は無作為に割当てられた枢機卿を指名し、その枢機卿のために自分が選ぶ祈りと犠牲を神に捧げるように招かれました。枢機卿たち自身は、自分たちが「霊的に選任」されることを知っており、その申し出についてコメントしていました。合計で5,52,383件の枢機卿のためのとりなしの祈りが採択されました。コンクラーベが結論を出したとき、このサイトは「教皇様が選出されました：皆さんの祈りに感謝します“Habemus Papam, thank you all for praying”」と報じました。

教皇フランシスコは、メディアや世の中一般の選びではなく、聖霊の選びによるものでした。それは、教会を愛する何百万の人びとの熱心なとりなしの実りであり、教皇は、その人柄ご自身、この困難な時代に教会を操航するのにふさわしい霊的な委任と塗油を受けておられるのです。教皇フランシスコご自身が、この選挙の報道関係者に次のように語られました：「この起こったものごと全てにおいて、主役は、究極の分析では（よく調べてみると）、まさに聖霊なのです。聖霊は、ベネディクト16世が教会のためを思っただけの決定を励まされたのです。」聖霊は枢機卿たちを祈りにおいて、そして選挙において導かれました。この偉大な奇跡の証人は、一体、聖霊がこの教会の中で働いていないと言える人はいるのでしょうか？そして新教皇が聖霊の満ち溢れるものを楽しめない人だ、と言える人はいるのでしょうか？驚きの選択となった教皇フランシスコの選出は、教会における聖霊の現存と働きをまさに確認するものになりました。3月13日の夜、大聖堂のバルコニーに新教皇が現れたその時、聖ピエトロ大聖堂広場には雨天にも拘わらず、およそ15万人の歓呼の群衆で埋まり、世界中のテレビ報道が注視するなかで、教皇は言葉少なく、発話した最初の言葉は、「ローマに、そして世界に（祝福を）」（Urbi et Orbi）でした。教皇としての最初の公的行為において、教皇フランシスコは伝統を破り、そこに居る群衆への祝福よりも、人びとにご自分のために祈ってほしいと願われました。「今、わたしは皆さんに祝福をしたいのですが、その前にまず皆さんにお願いがあります。この司教の祝福に先立ち、主がわたしを祝福して下さるように、（ミサの中で）皆さんがそれぞれの司教のためにする祈りを、わたしの上に祈って頂きたいのです。どうぞ、沈黙のうちに、この祈りを祈りましょう。」この新教皇のその民への最初の願いは、彼のために祈ることであった。教皇フランシスコの選挙は、ローマ・カトリック教会における単純さと謙遜の新しい時代への扉を開いていると、読者の皆さんは考えませんか？

何人かの人びとから、新教皇とカトリック・カリスマ刷新の関係について照会を受けたので、わたし（Cyril John）は教皇フランシスコについて書くことにしました。わたしがここまで描写したよう

（カリスインディアは、インドのカトリック・カリスマ刷新の隔月発行誌として1974年に発刊された。2002年から月刊誌。発行者 Mr. Cyril John シリル・ジョン）この記事は5月号 巻頭言 2

「教皇フランシスコとカトリック・カリスマ刷新」

に新教皇と聖霊とはかなり近い関係にあり、それゆえに聖霊に導かれる諸運動との関係があることも雄弁に語っていると思います。崩壊に瀕した教会の修復のために主の召命を受けたアッシジの聖フランシスコに倣うようにその名を教皇名に選んだ最初の教皇であるという事実が、教会にリバイバルをもたらそうと考える新教皇の優先度を明白に示しております。ご承知の通り、アッシジの聖フランシスコは、教会が使徒的熱意を取り戻すのを助けようとした12世紀の偉大な改革者でありました。この名前が新教皇にふさわしい理由は一つだけではありません。彼がコンクラーベに出かけようとするとき、彼の友人は彼の履き古した靴を見て、自分が贈る靴と履きかえるように頼んだ。この新しい靴を履き往復航空券を手にして、彼はローマに向かったのです。ブエノスアイレスの大司教として彼は、大司教座に住むよりはアパートの一室を選び、バスなどの公共交通機関で通い、自分の食事は自分で料理していました。アッシジの聖フランシスコのように、この教皇は、教会が霊的に貧しく、謙遜に、そしてキリストのように、弱者と身寄りのない者への預言者の務めを尽くすものであることを求めておられるのです。

ベルゴリオ枢機卿は、アルゼンチンのカトリック・カリスマ刷新を強力に支持しました。教皇選挙のその日に、チリのマリア・ホセ・カントス・デ・オリズ (Maria Jose Cantos de Ortiz) は、枢機卿に、ICCRS 評議会メンバーと枢機卿との写真を E メールで送りました。その人たちはバチカン在 ICGRS 評議会のオレステ・ペサーレ (Oreste Pesare) 事務長、アメリカのジム・マーフィ (Jim Murphy)、アルゼンチンの (ピノ・スカフロ (Pino Scafuro) と彼女自身などカトリック・カリスマ刷新のメンバーたちです。ベルゴリオ枢機卿は、いつも人びとと共に祈り、人びとにいつも彼のために祈るように求める方なのです。ベルゴリオ枢機卿の開放的で温かい人柄のために、アルゼンチンでは福音派とカトリックの関係はすばらしくよい関係にあります。クレセス (CRECES = Renewed Communion of Catholics and Evangelicals in the Holy Spirit : カトリックと福音派教会の聖霊における刷新的交わり) という運動がありますが、枢機卿は 2003 年~04 年の当初から、それを励ましてきました。2007 年のその大会では、ラニエロ・カンタラメサ神父さま (Raniero Cantalamessa) が講師の一人でした。その時、ベルゴリオ枢機卿は、跪いてカンタラメサ神父とブエノスアイレスの司牧グループに祈ってもらったのです。(注 : Raniero Cantalamessa, OFM Cap 師は、1934 生まれ、イタリア人、1980 年以来教皇の聴罪師 - Pope John Paul II, Pope Benedict XVI and Pope Francis. -) 教皇の選挙後に、ペンテコスト派の一つがそのウェブサイト、カンタラメサ神父らに祈られる姿のこの時の枢機卿の写真を「聖霊に充たされ、エキュメニズムに深く身を置くベルゴリオの選出を喜ぶ」との説明を付けて掲載しました。ICCRS の教義問題委員会の一員であるオーストリアのピーター・ホッケン (Peter Hocken) 神父は、たまたまコンクラーベに出かける直前にベルゴリオ枢機卿を訪ねたのですが、「その時わたしはメシアニック・ジュウ (Messianic Jew) の司牧者と一緒でした。面会の終わりに、我々は、枢機卿のローマへの旅のために、またコンクラーベのために祈りました。」と語っています。クレセス (CRECES) のペンテコスト派の司牧者はその出発前に枢機卿のために祈るためそこに居合わせたのだとわたし (Cyril John) は理解しました。「ホッケン神父は『我々は、教皇フランシスコは刷新の強力な支持者となられることでしょうし、教皇が、今日の聖霊のほとばしりについてのキリスト教間のエキュメニカルの特徴に理解があると確信してよい』と語る」からです。

(カリスインディアは、インドのカトリック・カリスマ刷新の隔月発行誌として 1974 年に発刊された。2002 年から月刊誌。発行者 Mr. Cyril John シリル・ジョン) この記事は 5 月号 巻頭言 3

「教皇フランシスコとカトリック・カリスマ刷新」

英国の前 ICCRS 会長のチャールズ・ホワイトヘッド氏 (Charles Whitehead) は「私たちは、よりくつろいだ、開放的で、単純な教皇をみることになるでしょう。教会の統治へのアプローチにも司教たちとのより共働的、対等な対話への方向性を、世の救い主イエスについても、もっと単純で、直接的な宣言をみることになるでしょう。」と述べています。そのように考える理由について、ホワイトヘッド氏 (Charles Whitehead) は、2005年に世界福音宣教に関する国際カリスマ的協議会 (International Charismatic Consultation on World Evangelisation,) のメンバーと共に彼がブエノスアイレスを訪ねたときの印象を述べています。「私たちは、ベルゴリオ (Bergoglio) 枢機卿を親切で、謙遜、ユーモアに富み、勇気があり、非常に知識豊かな方と分かりました。司牧的に繊細で、よく祈り、そしてイエス・キリストのペルソナと全ての人びとにイエスを知らせたい、という使命に全面的に身を置いている方と分かりました。」ホワイトヘッド氏は、「その会議の終わりになって、立ち去ろうとしたときに、ベルゴリオ (Bergoglio) 枢機卿は、跪いて、会議の面々にご自分のために祈ってくれるように願ったのです。とりわけメンバーに同伴した女性たちに、彼女らの祈りはいつも力強いからと言って、頼んだのでした」と述べている。人びとは枢機卿の上に手を置いて枢機卿のためにそして枢機卿と共に祈りました。教皇の伝記記者マテオ・ブンソン (Matthew Bunson) は教皇の毎日のスケジュールは、4時半か5時に起きて数時間祈ってから始まると報じています。

教会の歴史において非常に危機的な時期に当たったの教皇フランシスコの選出に、私たちは神の御手の働きを見ています。教皇ベネディクト 16 世の辞任の弁は、2013年2月14日に行われ、名誉教皇が、第二バチカン公会議の改革者の精神における、教会の「真の刷新」 (“real renewal”) を呼び掛けたときに、それはベネディクト教皇の神学に関する遺言書と受け取られました。教皇ヨハネ 23 世が 1959年1月25日に第二バチカン公会議を召集したとき、彼はローマ・カトリック教会の窓を開いていく分かは「新鮮な空気」 (“fresh air”) を取り入れたいと述べられたのでした。「アジornamento *Aggiornamento* (現代化)」こそが、教皇ヨハネ 23 世により第二バチカン公会議に提示された課題でした。この語は、語源的には「今日化する」 (“bringing up to date”) または「刷新」 (“renewal”) を意味します。このゆえに、教皇ヨハネ 23 世は、1961年12月25日の教会への祈りの中で、「主よ、この私たちの時代に、どうぞあなたの不思議を新たに起こしてください、一つの新しい聖霊降臨によって」とカトリック教会全体が祈ることを強く勧めたのでした。

教皇ヨハネ 23 世が、教皇選出後 3 か月以内に公会議を召集すると発表したとき、教皇は全ての人々を驚かせたのでした。選出の瞬間以来の教皇フランシスコの言葉と行動は、教会内外の多くの人びとを驚かせています。新しい教皇は、ヨハネ 23 世が夢見たこの「現代化」を生きておられるのであり、教皇の前任者が呼びかけた「真の刷新」に向けて働いておられるのです。教皇フランシスコはまさに「この時にあたって」 (エステル 4:14 “for just such a time as this“ Esther 4:14) 解放と救いのために働く方です。それは、できごとの多い、歴史的な教皇職となるでしょう。驚くべき方法で教会を刷新なさる教皇フランシスコを通して働く聖霊を私たちは切望しています。私たちの役割として、私たちは、教皇のペトロの使徒職を通して、教皇が「新しい天と新しい地」 (黙示 21:1) をもたらすことができるように、祈り、教皇を支援しようではありませんか。

(カリスマインディアは、インドのカトリック・カリスマ刷新の隔月発行誌として 1974 年に発刊された。2002 年から月刊誌。発行者 Mr. Cyril John シリル・ジョン) この記事は 5 月号 巻頭言 4